

# 2022 年度 一般入学試験 前期日程 (2 月 2 日)

## 国

## 語

(試験時間 60分)

### 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、29ページあります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

#### ① 試験コード欄・座席番号欄

試験コード・座席番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

#### ② 氏名欄

氏名・フリガナを記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

|    |
|----|
| 10 |
|----|

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

| 解答<br>番号 | 解 答 欄 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|----------|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10       | ①     | ② | ● | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

## 第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～11）に答えなさい。

いうまでもなくコロナ禍がもたらした最大の災いは、「空気の共有」に対する全世界の人々の忌避感である。わたしにしても時折、人と会うとき半無意識に顔をそむけ、距離をとっている。ふつうだったらこれは相手にいふかられるよそよそしさだ。しかるに音楽とはまさに、人と人の間のこうした距離を縮めるためにこそ、存在してきたはずだ。だから「ソーシャル・ディスタンス」を強いられては、音楽は **X** になってしまったらう。どんなにがんばってみても距離が縮まらないのだから、存在している意味自体がなくなる。例えばシールドでステージと客席を仕切ってライブハウスを再開したとして、もちろん最初は久方ぶりの生の音楽ということで感慨もひとしおだろうが、やがて **A** シュールレアリスムの **かい** 乖離感が生じないだろうか。いわば集わない／集えないことを確認するために、わざわざ集っているというような妙な感覚である（周知のようにソーシャル・ディスタンスとは感染防止のための新しい生活様式のキーワードであり、飲食店などいたるところで「ソーシャル・ディスタンスのために……をお願いします」といった貼り紙が出されるようになった）。

これが文学の場合なら、一人で誰とも会わず読むのが常態であるから、こうした非常時にとても向いた形式だといえる。また美術も音楽に比べれば「孤独な鑑賞」の側面が強い。一枚の絵を前に何千人もの人が群がって、抱き合って熱狂している光景など想像もつかない。それにたとえ美術館が **い** ヘイサになったとしても、「絵がなくなってしまう」などということは起きない。絵はモノだから、盗難にでもあつていない限り、（おそらく） **B** ちゃんとそこにある。しかし音楽は違う。それはモノではなく、空気を振動をリアルタイムで共有する芸術形式だ。したがって **B** 人と人が空気を共有しなくなったら存在しないも同然になる。しかしまた、複数の人が空気を振動を同時に共有するからこそ、音楽だけがもつあの興奮と熱狂と一体感は生まれてくる。

今わたしは「人と人が空気を共有しなくなったら音楽は存在しないも同然」と書いた。いぶかる人もいるだろう。「いや、そんなことないよ、コロナ禍による自粛期間中も一人自宅で音楽を熱心に聴いていたよ？」と。議論の **そう** 錯綜を避けるために **【a】** 言おう。音楽には **C** まったく性格が違う二種類の「音楽」があるのだ。ライブ音楽とメディア音楽である。そしてわた

しが「音楽が消えた」というときに指しているのは前者であり、「自粛期間中もずっと音楽を聴いて癒やされていた」という人が指しているのは後者なのである。

それでも【b】異論はありうる。「コロナといわずでにかなり前から、もうほとんどの人は電気メディアを通じた音楽しか聴いていなかったのではないか、ライブの音楽をわざわざ聴きに行く人などごく少数のマニアだけだろう？」「音楽」とは今やメディアを通して聴くものになっているのだから、ライブがなくなろうがたいした変化はないし、そんなことを惜しむのはただのノスタルジーじゃないか？」といった反論だ。もちろんわたしは「ライブこそが本来の／本物の音楽なのだ！」などともあるといたいだけだ。例えばこのところよく「ネット飲み会」や「ネット帰省」といったことがいわれるようになった。しかし本当に問うべきは、ネットで故郷の家族や親戚と話したとして、それは果たして「帰省」なのかということだろう。「ネットでも簡単に……できちゃう」というオートメーション化を無反省に受け入れることは危うい。安直に「ネット帰省」などと口にする、その瞬間から「実際は帰省できなくなっている」という事実が目に入らなくなってくる。故郷に自ら足を運ばないことで決定的に失われる何かを見逃してしまう。

音楽においても問題の所在は同じだ。例えばある歌手の歌声という「コンテンツ」を聴者の耳元に確実に送り届けられさえすれば、手段が何でも同じだということになるのか？ 音楽とはその場でステージと客席が一緒になって作り上げる何かではなくて、通販のパッケージのようなものだったのか？ 情報伝達の利便性だけが選択基準になっていいか？ 何度もいうが、わたしは録音音楽を決して否定はしない。そもそも録音資料がなければわたしのような職業は今や成り立たない。【c】、ライブ音楽とメディア音楽を「似ても似つかないもの」と区別することが、状況認識にとって有効な局面もあるということに、注意を向きたいのである。

三輪眞弘はメディアと音楽のかかわりをラディカルに問い直す作品を発表し続けてきた作曲家であるが、彼は「録音された音楽」と「生の音楽」とは根本的に別ものであり、前者は「音楽」ではないということを明確にするべく、「録楽」という概念を

提唱した。三輪によれば音楽とは本来、今そこに人間がいて、今その場で聴かれるもの以外ではあるはずがないのであり、複製技術によって不在の人間が奏でる何かは録音ではあっても音楽ではない。三輪によればそれは映画が演劇でないのに等しい。これをわたしなりに解釈すれば、生の芝居に対する映画が一種の幻灯であるとする、生の音楽に対する録音は幻聴のようなものだとということになる。わたしたちはコンサートやライブが自粛されていた間ずっと、音楽の幻聴を聴いていただけなのかもしれないのである。

ライブ音楽とメディア音楽の違いが見えにくいとすれば、その最大の原因は、メディア音楽を聴いて「音楽らしきものがそこから聞こえてくるのだから、きつとそこに人がいる（いた）はずだ」と思ってしまう、わたしたちの素朴な反射反応だ。映画を見て、つい芝居と同じように、そこに人は確かにいると感情移入するのと同じである。トーマス・マンの長篇小説『魔の山』（一九二四年）の終わりのほうに「楽音の泉」という面白い章がある。それは主人公が生まれて初めて蓄音機というものを目にする場面で、彼の目に蓄音機が棺桶おびのように映るというくだりが出てくる。つまり主人公は「その箱から音が聞こえてくるのだから、きつと中には誰か（あるいは過去にそれを歌い録音した歌手の亡霊）が入っていて、その彼が歌っているのではないか」と考えたということだ。もしそうだとしたら、たとえそれが亡霊であったとしても、確かにこれは録音ではなく音楽だ。

人の名前というのは不思議なもので、たとえ百年前のノイズだらけの録音であれ、ほとんど原形をとどめないまでに加工された最新録音であれ、そこに演奏者の名前が貼りつけられているだけで、わたしたちはそれをいわば真に受ける。『魔の山』の主人公に似て、聞こえてくる音の向こうでは実在のサラサーテが、マリア・カラスが、マイケル・ジャクソンが、星野源ほしのげんがそれを奏でたり歌ったりしている（いた）と素朴に思いなす。実際は録音メディアを通してまったく似ても似つかないものに変形されているかもしれないにもかかわらず、である。そしてわたしたちは脳内変換によって、PCネットワークの彼方かなたのバーチャルな演奏現場へと自分をワープさせ、そうすることで、蓄音機やCDプレーヤーやスマホから聞こえてくる録音もライブと変わらないう「音楽」として聴きなし、そこにロマンチックに感情移入するのである。

わたしにしても例えば伝説のピアニスト、ウラディミール・ホロヴィッツが十二年ぶりに舞台復帰した一九六五年のいわゆる

「ヒストリック・リターン」のライブ録音を、長い間「本気で」信じてきた。「これは一九六五年五月九日のカーネギーホールで本当にあったことなのだ」と熱狂してきた。しかし近年になって、従来の録音は大幅な修正版だったことが明らかにされ、今度は「本物の」ヒストリック・リターンのライブ録音が出た。フルトヴェングラーの伝説的なバイロイトでの《第九》ライブも、同じように近年になって「修正なし」のライブ録音が発売された。結局のところ録音とはどこまでいっても電気が作り出す虚構の可能性を排除できないのである。

こうしたタイプの録音は、おそらく「伝統的な」録音と呼ぶことができるだろう。ニュートラルなドキュメンタリーたらしとする録音である。聞こえてくる音の向こうに實在の人間の幻影を作るタイプである。それに対して、こうした人間的なものの幻影を断ち、いわば「無人電気音楽」ともいふべきものをダイタンに目指したのが、一九七〇年代半ばにテクノの先鞭をつけた西ドイツのクラフトワークである。このグループの有名作『アウトバーン』（一九七四年）では、ブザーのようにぎくしゃくした無表情な電子音のアイロニーが炸裂する。音の向こうに生身の人間の存在をほとんど想起させない録音だ。このタイトルは「高速道路」というより「自動軌道」と直訳したほうが音楽内容にぴったり来るだろう。人間すらロボットになってしまった超未来の全自動電気音楽を、彼らは演出する。ちなみにクラフトワークはデュッセルドルフで結成されたグループだが、そこからごく近いケルンの電子音楽スタジオに頻繁に出入りしていたと聞いたことがある。ここはドイツを代表する現代音楽の作曲家シュトックハウゼンの電子音楽創作の牙城であり、無人音楽のアイデアもこういうところから出てきたのであろう（シュトックハウゼンの傑作『試作Ⅱ』（一九五四年）は完全に人工音だけで合成された最初の電子音楽で、つまり「無人音楽」の嚆矢である）。

他方、クラフトワークのように「無人」を不気味なまでに前面に押し出すわけではないが、かといって伝統的な録音のように人間的な幻影を作り出すわけでもなく、「生音」はあくまで音響素材の一つとして処理し、それでいて音楽としてのある程度の感情移入はキョウヨウするといったタイプの作品も、いわゆる癒やし系を中心として近年多い。おそらくその源流はイギリスのブライアン・イーノらに代表される一九七〇年代以来のアンビエント・ミュージック（環境音楽）と察するが、わたしが真っ先に思い出すのはオノ・セイゲン（小野誠彦）とパール・アレキサンダーの『メモリーズ・オブ・プリミティヴ・マン』（二〇一六年）

というアルバムだ。

これは小野自身がギターを演奏したライブ録音の断片、アマゾンの森の音、ビルに響く靴音、アレキサンダーのコントラバスの響きなどをコラーージュした録音なのだが、こういう作品を聴くと録楽が従来の音楽より、むしろインス<sup>(注6)</sup>タレーションとかコラーージュなど造形芸術に近いことがよくわかる。CDアルバムという空間のあちこちに不思議な形をした音のオブジェが置いてあって、聴き手はそれらの間をきままに散歩する。「サウンド美術館散歩」のような作品なのである。またこうしたアルバム制作には極めて高度な音響合成や補正技術が必要であることは言をまつまいが、こうした作業がパソコンを使ったポスター・デザインとか映画におけるフィルム編集<sup>(ホ)</sup>に近いだろうということはヨウイ<sup>(ニ)</sup>に想像がつく。録楽はむしろ美術や映画に近いのだ。

このところ多くの音楽家たちがセイリ<sup>(ホ)</sup>ヨク的にストーリーミングを行い、自分たちのメッセージを伝えようとしていることは周知の通りである。しかしステージで客を入れてやってもストーリーミングで配信しても「内容」は同じで、ファンのもとへ送り届ける伝達の「手段」が違うだけなどとナイーヴに信じてはいけない。レストランで食べる食事とテイクアウトが別ものであるのと同じように、音楽と録楽はまったく違うものなのだ。だから人と人が空気を共有しつつ音楽を聴くことがかなわなかったこの間、やはり世界中で音楽は消え、録楽だけになっていたのである。

(岡田暁生の文章による。ただし、一部変更した。)

(注) 1 シュールレアリスム：超現実主義。現実離れた幻想的なさま。

2 サラサーテ：スペインの作曲家・ヴァイオリン奏者(一八四四―一九〇八)。

3 マリア・カラス：アメリカのソプラノ歌手(一九二三―七七)。

4 マイケル・ジャクソン：アメリカ出身のシンガーソングライター(一九五八―二〇〇九)。

5 フルトヴェングラー：ドイツの指揮者・音楽家(一八八六―一九五四)。

6 インスタレーション：現代美術における表現手法の一つ。場所や空間全体を作品として体験させる芸術のこと。

問 1 空欄

解答番号は

X

Y

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1

2

X

1

① 十把一絡<sup>から</sup>げ

② のれん分け

③ 貧乏暇なし

④ 商売あがったり

⑤ 濡<sup>ぬ</sup>れ手に粟<sup>あわ</sup>

Y

2

① 正統的

② 背信的

③ 熱狂的

④ 反動的

⑤ 絶対的



問2 破線部ア「ひとしお」・イ「真に受ける」・ウ「牙城」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 3 ) 5。

ア 「ひとしお」

- 3
- ① しばらく集中すること  
② 一度息をつくこと  
③ 他と異なること  
④ 特にすぐれていること  
⑤ より程度がますこと

イ 「真に受ける」

- 4
- ① 本格的に受け入れる  
② 衝撃を与えられる  
③ 心に直に響く  
④ 疑うことなく信用する  
⑤ 誠実に対応する

ウ 「牙城」

- 5
- ① 本拠地  
② 最前線  
③ 隠れ家  
④ 秘境  
⑤ 頂点



問3 空欄【 a 】 【 c 】に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

6

ゝ

8

。

a

6

① わざと

② 控え目に

③ ひとまず

④ 逆に

⑤ 敢えて

b

7

① とりわけ

② とりもなおさず

③ なお

④ 実は

⑤ はからずも

c

8

① そのため

② そして

③ きつと

④ ただ

⑤ したがって

問4 波線部(A)「シニールレアリスム的な乖離感」とあるが、なぜそのような感覚が生じるのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

9。

- ① 「空気の共有」を避ける世界的な状況下でライブハウスに集まっても、外の様子と違いが大きすぎるために音楽に没頭できないから。
- ② 人とよそよそしく距離をとることが一般的になった現在、音楽を聴くためだけに人々が集まること自体に違和感を覚えているから。
- ③ せっかくライブハウスに集まっているのに、実際は演奏者と観客が空気を共有できていないことに気づかされてしまうから。
- ④ 久しぶりに生の音楽に触れたせいではなかなか以前のような興奮と熱狂と一体感を思い出すことができず、とまどってしまっているから。
- ⑤ 演奏者がどんなに演奏に力を入れても、シールドで仕切られることによって観客に聴こえる音は微妙に変わってしまうから。

問5 波線部(B)「人と人が空気を共有しなくなったら存在しないも同然」とあるが、なぜ筆者はこのように考えるのか。その

理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 10。

① 音楽は人と人の距離を縮め、親しくさせる力を持つが、複数人で集まることができない状況ではその効果が十分に発揮できないから。

② 音楽は同じ趣味を持つ人たちと共有するものであり、文学のように一人で孤独に鑑賞するものではないから。

③ 絵はその前に何人の人が群がっても同じだが、音楽の場合、演奏の良しあしは観客の興奮や熱狂など会場の空気によって左右されるものだから。

④ 音楽は空気振動をリアルタイムで共有する芸術形式であり、絵のように物体として存在するものではないから。

⑤ 音楽はステージ上の演奏者が生み出すものではなく、観客同士が空気を共有する中で生まれるものだから。

問 6

波線部(C)「まったく性格が違う二種類の『音楽』がある」とあるが、筆者の考える「ライブ音楽」と「メディア音楽」の違いを示す組合せの例として適切ではないものを、次の①～⑤の中から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

11

12

。

- ① 少数のマニア向けのものと一般向けのもの
- ② その場でステージと客席が一緒に作り上げる何かと通販のパッケージのようなもの
- ③ 生の芝居と映画
- ④ ホロヴィッツによる「ヒストリック・リターン」のライブ録音とシュトックハウゼンの電子音楽
- ⑤ レストランで食べる食事とテイクアウトの食事

問7

波線部D)「このところよく『ネット飲み会』や『ネット帰省』といったことがいわれるようになった」とあるが、「ネット帰省」についての筆者の考えの説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

13。

- ① ネットで故郷の家族や親戚と話すことで、帰省をしなくても用が足りるようになってしまい、実際に故郷に足を運ぶ機会を見失ってしまう。
- ② ネットで故郷の家族や親戚と話すことと故郷に自ら足を運ぶことは、行動として似ても似つかないものであり、同じ「帰省」という用語で呼ぶと混乱が生じる。
- ③ ネットで故郷の家族や親戚と話すことを「帰省」と呼ぶと、実際は帰省できないという事実が目に入らなくなり、故郷に赴いてこそ得られるものに気がつかなくなる。
- ④ 帰省は音楽と同様、その場が集まって自分と相手とが一緒になって作り上げる何かに意味があるので、ネットで故郷の家族や親戚と話してもノスタルジーは癒やされない。
- ⑤ ネットでも簡単に帰省に代わる体験はできるが、その事実をすんなりと受け入れることは、音楽に関しても情報伝達の利便性を優先することにつながる。

問 8 波線部(E)「音楽の幻聴を聴いていただけなのかもしれない」とあるが、なぜ筆者はメディア音楽を「幻聴」と呼ぶのか。

その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① メディア音楽は、聴き手が演奏者と同時にその場にいる音楽とは異なり、複製技術によつて不在の人間が奏でるものであるから。
- ② メディア音楽では、聴き手が聞こえてくる音楽に対して、過去にそれを歌い録音した歌手の亡霊のようなものを反射的に想像するから。
- ③ メディア音楽では、聞こえてくる音楽が原形をとどめないまでに加工された虚構のものであることが多々あるから。
- ④ メディア音楽は、聴き手が脳内変換によつてバーチャルな演奏現場へと自分をワープさせ、ロマンチックに感情移入するものであるから。
- ⑤ メディア音楽は、聞こえてくる音の向こうに実在の人間の幻影を作り出そうとする作用を積極的に引き起こすものであるから。

問9

筆者は本文で、他の芸術形式を引き合いに出しながら音楽について考察している。この点を踏まえた本文の内容の説明として適切ではないものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

15。

- ① 美術館が閉まっても「絵がなくなってしまう」などということは起きない。絵はモノだから、盗難にでもあわないう限り、ちゃんとそこにある。対して音楽はモノではなく、元来存在しないも同然であると言える。
- ② 文学は一人で誰とも会わずに読むのが常態である。対して音楽は、一人自宅で熱心に聴く場合もあるが、何千人もの人が集まって熱狂して聴く場合もある。文学は音楽に比べて「孤独な鑑賞」の側面が強い芸術形式だと言える。
- ③ 『魔の山』の中に主人公が生まれて初めて蓄音機を目にする場面がある。主人公は蓄音機の中に誰かが入っていて、その彼が歌っているのではないかと考える。時代が変わって蓄音機はCDプレーヤーやスマホになったが、聴き手の認識はこの小説の主人公と似ている。
- ④ いわゆる癒やし系の音楽の源流であるアンビエント・ミュージック（環境音楽）の場合、聴き手はCDアルバムの中を美術館のようにきままに散歩する。この種の音楽は、従来の音楽より、インスタレーションやコラージュなどの造形芸術に近いと言える。
- ⑤ ポスター・デザインはパソコンを使う。映画はフィルム編集を行う。メディア音楽は、極めて高度な音響合成や補正技術を要するという意味で、美術や映画に近いと言える。



問10 筆者は「音楽」をどのようなものと考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号

で答えなさい。解答番号は

16

。

- ① 音楽は人と人の間の距離を縮めるために存在してきた芸術形式であり、ソーシャル・ディスタンスを強いられ、距離をとって「空気の共有」を避ける現在においてこそ、その必要性や重要性は増している。
- ② 音楽は物理的なモノとして存在するわけではなく、複数の人が空気振動を共有することだからうじて存在するものであり、メディア音楽を一人で自宅で聴いて癒やされるというのは、音楽の聴き方として好ましくない。
- ③ 百年前のノイズだらけの録音から、ほとんど原形をとどめないまでに加工された最新録音まで、メディア音楽にはさまざまな種類があるが、演奏者の奏でる音楽が聴き手に届くという関係は時代を超えて普遍的である。
- ④ メディア音楽の中には、人間的なものの幻影を断ち、音の向こうに生身の人間の存在をほとんど想起させないタイプの音楽があるが、これは生の音楽とは区別して「録音」と呼ぶべきである。
- ⑤ 音楽は本来的に、人と人がリアルタイムで空気を共有する芸術形式であり、「修正なし」のライブ録音であっても、ライブと同等の内容を聴き手に届ける「手段」になり得ているわけではない。

問11 二重傍線部(イ)～(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答

番号は 17 21。

(イ) ヘイサ

17

- ① 定期コウサを受ける
- ② 物事がレンサする
- ③ サベツをなくす
- ④ サテツを集める
- ⑤ サギにあう

(ロ) ダイタン

18

- ① タントウ直入に話す
- ② キョウタンに値する行動
- ③ タンネンな仕事ぶり
- ④ コンタンが見えている
- ⑤ ドタンバで逆転する

(ハ) キョウヨウ

19

- ① トツキヨを取得する
- ② 芸術界のキョウシヨウ
- ③ すばらしいカイキヨ
- ④ インキヨ暮らしに入る
- ⑤ 要求をキョウゼツする

(ニ) ヨウイ

20

① イギョウをたたえる

② 国王がタイイする

③ 機能をイジする

④ 一連のケイイを語る

⑤ カンイ検査を受ける

(ホ) セイリョク

21

① シセイを正して座る

② シンセイな誓いを立てる

③ ある分野にセイツウする

④ セイゼツな人生を送る

⑤ 人間<sup>いた</sup>到る所セイザンあり



第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

名匠、左甚五郎<sup>ひだりじんごろう</sup>が作った木彫りのネズミが動くとの評判で繁盛する宿屋<sup>ア</sup>。ねたんだ向かいの宿が地元職人にトラを彫らせる<sup>イ</sup>。トラにいらまれたネズミはおびえたように動かなくなった。落語「ねずみ」である。

話を聞いて甚五郎が来て見ると、何とも出来なトラである。甚五郎に「なんであんな出来損ないにおびえるのか」と聞かれたネズミ、「あれトラなの？」Xかと思った」……落語、講談、浪曲で庶民の人気を集めた甚五郎だった。

日光東照宮の眠り猫など甚五郎作と伝えられる建築装飾は全国100カ所近い建物にある。<sup>ロ</sup>だがその年代は室町時代末から江戸後期まで300年間近くに及ぶ。<sup>ハ</sup>この伝説的な名前は何人もの達人たちの仕事に支えられていたのである。

この列島の歴史の始まりから無名の職人<sup>ウ</sup>や地域の共同作業によって受け継がれてきた日本の木造建築の技術である。<sup>ニ</sup>その「伝統建築工匠の技」がユネスコの無形文化遺産に登録される。能楽や和食などに続く国内22件目の登録という。

対象の17分野は木工や左官、屋根の瓦ぶきやかやぶき、建具や畳作り、外観や内装の装飾、漆塗りなどなど。なかには職人の高齢化や後継者不足が技術の継承を脅かしている分野もあり、すべてが国の「選定保存技術<sup>ホ</sup>」となっている。

ユニークな伝統技術<sup>ニ</sup>こそが文化の垣根を越えて「クール」と映る今日である。<sup>ヘ</sup>どうか文化遺産登録が若い世代の関心を引きつけてほしい。むろん海を越えて来て技を極める「甚五郎」が現れるのも歓迎だ。

『毎日新聞』二〇二〇年二月一九日「余録」による

問1 破線部ア「繁盛する宿屋」のような文末の表現方法は、短歌や俳句の修辞法としても用いられることがある。これを何と

いうか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

22。

- ① 係り結び
- ② 体言止め
- ③ 擬人法
- ④ 倒置法
- ⑤ 連用中止

問2 破線部イ「ねたんだ」と近い意味の語句として適切ではないものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解

答番号は 23。

- ① そねんだ
- ② 羨んだ
- ③ やつかんだ
- ④ ひがんだ
- ⑤ 焼餅を焼いた

問3

空欄

X

に入れるのに最も適切な動物を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

24

。

- ① キツネ
- ② クマ
- ③ ネコ
- ④ イヌ
- ⑤ イタチ



問4 破線部ウ「職人」とあるが、「職人」を題材とした日本の近代小説に『五重塔』がある。その作者は誰か。最も適切なものを、

次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

25。

- ① 幸田露伴
- ② 二葉亭四迷
- ③ 樋口一葉
- ④ 菊池寛
- ⑤ 永井荷風

問5 波線部(A)「この伝説的な名前は何人もの達人たちの仕事に支えられていたのである」とあるが、これはどういうことか。

その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 実在するかも定かではない左甚五郎の名前が後世に残っているのは、落語や講談の名人がユーモアたっぷりの語り口で彼の名を広めたからだ。
- ② 職人として有名だった左甚五郎には全国各地に多くの優秀な弟子がおり、彼らは甚五郎が地元を訪れるたびに制作活動を手伝って作品を残した。
- ③ 「左甚五郎」は単なる個人の名前ではなく、周囲の仲間たちからその時代における木工の第一人者と認められた職人が名乗る称号のようなものだった。
- ④ 室町時代末から江戸後期まで、各地の無名の達人たちによって作られた作品がしばしば左甚五郎作とされることで「甚五郎」の名声は高くなっていった。
- ⑤ 時代を超えて綿々と受け継がれる木造建築の技術を用いた修復作業により、各地に残る甚五郎の作品は今も制作当時と変わらない姿を保っている。

問 6

本文の主旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

27

。

- ① 左甚五郎が創始し、その弟子たちによって受け継がれてきた日本の木造建築の技術が、職人の高齢化や後継者不足によって途絶えてしまうことが懸念されている。
- ② 伝統ある日本の木造建築の技術がユネスコの無形文化遺産に登録されることによって、木造建築にとどまらず他の伝統技術への技術的波及効果にも期待したい。
- ③ このままでは失われていく日本の伝統技術を守り育てるためには、単なる「選定保存技術」の指定にとどまらない政府の積極的な関与が不可欠である。
- ④ ユネスコの無形文化遺産登録を機会として、あまり人気のない伝統産業が実は「クール」であり国の大事な財産であることを日本の若い世代に伝えていきたい。
- ⑤ 長らく列島の生活と文化を支えた「伝統建築工匠の技」には後継者不足に悩まされているものもあるが、文化遺産登録をきっかけに内外の若者にその価値と魅力を知ってほしい。

問 7 二重傍線部(イ)～(ホ)の品詞名を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は

28

～

32

。

(イ) トラを彫らせる

28

(ロ) だがその年代は

29

(ハ) その「伝統建築工匠の技」

30

(ニ) 伝統技術こそが

31

(ホ) どうか文化遺産登録が

32

① 名詞

② 動詞

③ 形容詞

④ 連体詞

⑤ 副詞

⑥ 接続詞

⑦ 助詞

⑧ 助動詞